

## 追悼：コルナイ・ヤーノシュ回想



János Komai, full member of the Hungarian Academy of Sciences, emeritus professor of Harvard and Corvinus Universities, officer of the French Legion d'Honneur, member of the Swedish, American, and other academies, died on October 18th 2021. He was 94 years old.

Funerary honors are provided by the City of Budapest, Corvinus University, and the Hungarian Academy of Sciences.

A non-religious farewell ceremony will be held at 3 p.m. on November 4th at the Makovecz funeral hall, Farkasrét Cemetery, Budapest. The family kindly requests those who would contemplate bringing flowers or wreaths to make a donation instead, if they are so inclined, to [ahang.hu](mailto:ahang.hu) or [batortabor.org](http://batortabor.org).

His children: Gábor, Judit and András

© Gergely Túri, 2019

2021年10月18日、コルナイ（1928-2021年）は93歳の生涯を終えた。社会主義圏の経済学者でありながら、*Anti-Equilibrium*（反均衡の経済学）（ハンガリー語版1968年、英語版1971年。日本語翻訳は日本経済新聞社から1975年に出版）で主流派経済学（新古典派経済学）の泰斗の関心を惹起し、コルナイの国際舞台での活躍が始まった。多くの大学から客員研究員への招聘が舞い込み、コルナイはケネス・アローの推薦を受けて、1972-1973年の学期をスタンフォード大学で過ごした。当時の研究室の隣人が宇沢弘文と青木昌彦であった。コルナイと宇沢・青木両氏との交流はここから始まった。

コルナイの波乱の生涯は自伝に詳しく叙述されている（『コルナイ自伝』日本評論社、2006年）。その訳者後書き（[http://www.morita-from-hungary.com/j-04/04-01/04-01\\_07.pdf](http://www.morita-from-hungary.com/j-04/04-01/04-01_07.pdf)）でコルナイと私の関わりを詳述した。また、コルナイ経済学の私の評価は「比較経済体制学会」機関誌（[http://www.morita-from-hungary.com/j-04/04-01/04-01\\_12.pdf](http://www.morita-from-hungary.com/j-04/04-01/04-01_12.pdf)）に掲載しているので、ここでは詳述しない。

1990年と1991年に、日本経済新聞社から、「コルナイがノーベル賞を受賞した際のコメント」を依頼された。ソ連・東欧社会主義の崩壊に果たした理論的な役割が評価されるだろうという予想は見事に外れ、用意したコメントはお蔵入りになった。コルナイ本人はその後も、「もしかしたら」と期待していただろうが、吉報を得ることなくこの世を去った。政治経済学（哲学）的な分析にノーベル経済学賞が与えられた事例はきわめて少なく、近年はますます応用数学的な分析に受賞者が集中していたので、難しいだろうと考えていた。

### 1980年代を席卷したコルナイブーム

「反均衡」の視点から社会主義経済を描写した *Economics of Shortage*（「不足の経済学」、ハンガリー語版、英語版とも1980年）は、商品不足（不均衡）現象から社会主義経済の機

能メカニズムを描写する分析体系である。1980年代を通して、コルナイの「不足の経済学」は社会主義経済を研究する経済学者を魅了した。1980年代の社会主義経済学はコルナイブームに席卷されたと言っても過言ではない。

1984年にハーヴァード大学経済学部教授に招聘されたコルナイは、半年をボストン・ケンブリッジで過ごし、半年をブダペストで過ごすという二重生活を始めた。1985年には社会科学院と世銀の招待で、トービン等とともに7名の招待者の1人として中国に招かれ、趙紫陽首相や若い経済学者との会談やセミナーに参加した。改革開放を進める中国にはそれを裏付ける理論が必要だった。中国の若手研究者はその基礎をコルナイに求め、コルナイの著作が次々と中国語に訳され、「不足の経済学」は社会科学の書籍として、ベストセラーにもなった。

ソ連・東欧では経済停滞から政治的な動きが活発になり、反体制派はコルナイに体制変革の理論的根拠を求めた。「社会主義経済が続く限り、商品不足は永遠に解消されない」。コルナイの著書は合法非合法の出版物となってソ連・東欧圏の知識人に読まれ、「コルナイを読んだか」というのが、知識人の中の挨拶になった。そして、東欧圏は1989年に体制崩壊を迎え、ソ連も1990年代初めに崩壊し、20世紀社会主義の歴史が終末を迎えた。

コルナイがハーヴァードに招聘される前年の1983年1月、コルナイは法政大学の招聘で、初めて日本を訪れた。これが日本でのコルナイブームのきっかけになった。

### コルナイ招聘の舞台裏

1975年に日本語出版された『反均衡の経済学』だが、1971年に英語版が出版されて間もなく、大学院で同僚の久保庭真彰君（一橋大学名誉教授）から、一緒に翻訳しないかという誘いがあった。出版社とのコネもない状態で、大学院生の翻訳が出版できるはずもないが、ぐずぐずしているうちに日本語訳が出た。分厚い難解な書物が出版されたのに驚いたが、訳者はハンガリーに留学していた物理学者岩城淳子（出版当時、桜美林大学講師）、経済学者岩城博司（出版当時、高崎経済大学助教授）夫妻であった。訳者として適任だった。その後、岩城博司さんとお会いした時に、「ポストクで仕事がなかったので、妻のハンガリー留学に同伴した」と話されていた。この出版には玉野井芳郎（東大教授）さんと、青木昌彦（スタンフォード大学教授）さんの仲介があったと記されている。テーマは魅力的だが、実売数は500部に満たなかったのではないかと思う。限られた専門家だけが購入しただろう。後に、コルナイ来日に合わせて、日本経済新聞社に翻訳書出版の可能性を打診した時には、「『反均衡の経済学』は赤字出版だった。採算がとれない」と断られた。

私がハンガリー留学期間中（1978-1980年）、コルナイのことは全く念頭になかった。日本に戻ってから、*Economics of Shortage* が出版されたことを知り、急いで取り寄せた。1982年春、短期間ハンガリーへ出張した時に、初めて科学アカデミー附属経済研究所にコルナイを訪ね、「不足の経済学」に関連する論文を受け取り、日本での翻訳出版や日本行きの可能性について話した。

ちょうどその頃、勤務先の法政大学社会学部で創立 30 周年を祝う講演会を開きたいという話題が持ち上がっていた。しかし、法政大学社会学部は東大文学部社会学科出身者の牙城で、分野が違う若造が口出しするのは憚られた。もっとも、社会学部自体は社会学科と応用経済学科の二つの学科から構成されているので、社会学者だけに人選の権利をあるわけではなかった。イギリスの社会学者ドナルド・ドーアさんの名前が出ていたが、ちょっと月並みかなという意見もあり、人選が進まなかった。そこで、私がコロナイはどうかと提案した。社会学部教員にとって初耳の名前である。「いったい、それは誰」という反応だったが、若手の社会学者が経済学者の友人知人に打診し、コロナイの評価を聞いて回ったようだ。『反均衡の経済学』が専門家の間で注目されているのが分かった。「ノーベル経済学賞の候補にもなりえる」と評価している人もいたようだ。それで候補として悪くはないということになった。

当時、法政大学は町田キャンパス移転問題を抱えており、社会学部と経済学部が移転を検討していた。大学紛争時代に学部・大学院時代を過ごしてきた若い教員は、荒廃した飯田橋キャンパスに失望し、移転による大学再生を図るべきと考えていた。最終的に活きのよい若手教員が多い経済学部と社会学部が移転に名乗りを上げた。移転決定にかかわる最大の難関は法政大学が長年抱える学生自治会問題だった。学生自治会といっても、すでに在學生はほとんど活動に参加しておらず、池袋の本部から活動家を派遣する中核派が、経済学部と法学部の教授会を脅し、大学が学生から代理徴収していた自治会費を分捕っていた。社会学部は黒ヘルメットのノンポリ部隊だった。中核派にしてみれば、キャンパス移転によって自治会費が受け取れなくなれば、大きな資金源を失う。法政大学にとって、キャンパス移転は大学再生をかけた戦いであった。法学部教員は中核派の脅迫に耐えきれないという弱腰と、都心は学外の仕事に便利という実利的理由で、早々に移転を諦めていた。

このような状況で、私が 1981 年から自治会担当（学部副主任）に任命された。「2 年近くもハンガリーで自由を満喫してきたのだから、自治会担当になって学部奉公せよ」ということである。「誰かが学生問題の盾になってくれれば、とりあえず自分の身には火の粉は降ってこない」という保身術が、学部教授会には蔓延していた。教授会長老たちは「若手が学生問題を担当してくれるなら、好きにやってもらって結構」という姿勢で、若手が強く押せばいろいろな要求が認められる状況にあった。最終的に、「盛田には学生担当の汚れ仕事をやってもらっているのだから、彼がそれほど言うならやらせてみれば」ということになった。「その代わり、誰もヘルプしない。一人でやれよ」というのが暗黙の了解である。

すでに新年度が始まっており、予算の横取りから始めなければならなかった。国際交流センター事務方との予算交渉、コロナイとの渡航のやり取り、安い宿泊施設の確保、記念講演会と国際セミナーの組織、記念パーティの組織、セミナー招待者のリストアップ、法政以外の大学での講演会の依頼、プログラムの作成、講演会後の箱根・日光の旅行等々、すべて一人で手配した。宇沢さんには東大での講演会をお願いしたが、「たいした謝礼もないし、人を集めるのが大変だから勘弁して欲しい。その代わり、なんでもお手伝いする」

と言われた。そこで、記念講演会の前座とセミナー議長をお願いした。青木さんには京都大学での講演会の組織をお願いした。神戸大学の大津定美先生が京都のマンションを宿舎に提供されたと記憶している。



1983年1月 法政大学社会学部創設30周年記念講演会（筆者が通訳を担当）

**法政大学社会学部創設30周年記念講演会  
および法政大学国際交流セミナーへのご案内**  
——Prof. Kornaiを迎えて——

**記念講演会**（学生および一般に公開）

Prof. Kornai「取極理論と歴史的现实——Tinbergenの論文から21年たって」  
宇沢 弘文 「現代経済学からみたコルナイの世界」  
とき：1983年1月11日（火） PM 1:00～5:30 ところ：法政大学69年館920番教室  
主催：法政大学社会学部

**国際交流セミナー**（研究者対象）

1983年1月14日（金） AM10:00～PM5:30  
法政セミナー：「不足の経済学」にかんする討論  
ところ：日本私学振興財団会議室（千代田区富士見1-10-12）

1983年2月1日（火） AM9:30～PM6:15  
法政セミナー：現代ハンガリーの経済と社会  
ところ：法政大学総長会議室

尚、セミナーは一般に公開されていません。参加希望者は別途お申し込み下さい。  
主催：法政大学国際交流センター  
（〒102 千代田区富士見2-17-1 TEL.264-9315）

**Prof. Kornai János(コルナイ・ヤーノシュ)のプロフィール**

1928年ブダペスト生れ、国籍ハンガリー  
1955年より経済研究所、繊維工業研究所、コンピュータ・センターの研究員として勤務  
1967年より現在に至るまで科学アカデミー付属経済研究所に勤務  
1968年よりK. Marx経済大学教授(非常勤)  
1982年ハンガリー科学アカデミー正会員



学 位 経済学博士(1961年)、Ph. D.(1966年)  
パリ大学名誉博士(1978)、ボズナン大学名誉博士(1978)

その他 アメリカ経済学会名誉会員(1976)、Econometric Society会長(1978)

客員教授 London School of Economics(1964)、University of Sussex(1966)、Stanford University(1968, 1973)、Yale University(1970)、Princeton University(1972)、Indian Statistical Institute(1975)、Stockholm University(1976-77)、University of Geneva(1981)

著 書 1. *Overcentralization of Economic Administration*, Oxford University Press, Oxford, 1959.  
2. *Mathematical Planning of Structural Decisions*, North-Holland Publishing Company-Publishing House of the Hungarian Academy of Sciences, Amsterdam-Budapest, 1967 (1st edition) and 1975 (2nd enlarged edition). (Also published in Slovak, German and Polish.)  
3. *Anti-Equilibrium*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 1971. (Also published in Polish, Rumanian, German and Japanese.) 邦訳『反均衡の経済学』(岩城博司・岩城淳子訳)、日本経済新聞社、1975。  
4. *Rush versus Harmonic Growth*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 1972.  
5. *Economics of Shortage*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam, 1980.  
6. *Non-Price Control*, J. Kornai-B. Martos, eds., North-Holland Publishing Company-Akadémi Kiadó, Amsterdam-Budapest, 1981.  
7. *Growth, Shortage and Efficiency*, Basil Blackwell, Oxford, 1982.  
8. 『反均衡と不足の経済学』(盛田常夫・門脇延行編訳)、日本評論社、1982。

講演会、セミナープログラム

## 記念講演会・国際セミナー・プログラム

### 社会学部創設30周年記念講演会

- PM 1:00 学部長・理事あいさつ Prof. Kornaiの紹介  
1:30 宇沢弘文教授(東京大学)講演  
「現代経済学からみたコルナイの世界」  
2:30 Prof. Kornai講演(英語、通訳あり)  
Convergence Theory and Historical Reality  
—21 Years after Tinbergen's Paper  
5:30 終了

### 法政セミナー：『不足の経済学』にかんする討論

セミナー座長：宇沢弘文(東京大学経済学部) 進行：盛田常夫(本学社会学部)

予定討論者：岩田 昌征(北大スラブ研究所)  
久保庭真彰(一橋大学経済研究所)  
斎藤 稔(本学経済学部)  
佐藤 経明(横浜市立大学商学部)  
高須賀義博(一橋大学経済研究所)  
永井 進(本学経済学部)

- AM 10:00-11:30 Prof. Kornaiの問題提起(その1)  
11:30-13:00 討論  
PM 14:30-16:00 Prof. Kornaiの問題提起(その2)  
16:00-17:30 討論  
17:45- パーティー

尚、本セミナーの共通言語は英語ですが、必要最小限の通訳を行います。

### III. 法政セミナー：現代ハンガリーの経済と社会

セミナー座長：岡田裕之(本学経済学部) 進行：盛田常夫(本学社会学部)

- AM 9:30-11:30 AM 11:30-13:00  
Daniel Zsuzsa Gergely Attila  
「ハンガリーの住宅不足と住宅問題」 「ハンガリー工業労働者の状態」  
討論者：斎藤 稔(本学経済学部) 討論者：久澤修次郎(本学社会学部)
- PM 14:30-16:30 PM 16:45-18:15  
Prof. Kornai Móczár József  
「近年におけるハンガリーの経済改革」 「ハンガリーの成長戦略」  
討論者：佐藤経明(横浜市立大学商学部) 討論者：久保庭真彰(一橋大学経済研究所)

尚、本セミナーの共通言語は英語ですが、必要最小限の通訳を行います。セミナー終了後に講演者を開んで会食を行います。費用は実費(5,000円)です。会食希望者は事前にお申し込み下さい。

### 講演者のプロフィール

Daniel Zsuzsa (Mrs. Kornai): ダニエル・ジュジャ  
1932年ブレストン(ハンガリー南東部の都市)生れ。経済学博士(1978)、Ph. D.候補(1977)  
現在：ハンガリー国家計画庁付属経済計画研究所上級研究員  
著作：『Planning and Exploration: A Dynamic Multi-Sectoral Model of Hungary』,  
*Economics of Planning*, 1971, Vol.11, No. 3. pp.120-146ほか、経済計画の数理的処理  
にかんする論文が多数ある。

Móczár József: モーツァール・ヨージェフ  
1947年キシクンエジュハーズ(ハンガリー南部)生れ。  
現在：K. Marx経済大学講師、大阪大学社会  
経済研究所客員研究員。  
専攻：数理経済学

Gergely Attila: ゲルゲイ・アッティラ  
1950年アダベスト生れ。  
現在：科学アカデミー付属社会学研究所研究  
員、文部省政府給費生。  
専攻：産業社会学

「不足の経済学」セミナーが終わった後、少人数のグループで、小旅行を兼ねて法政大学箱根寮でコルナイを囲む私的な会合を開いた。セミナー終了後に、関心のある方はどうぞご参加くださいとアナウンスした記憶がある。一橋大学の友人たち以外に、法政国際セミナー参加者から参加の意向が示されたが、参加者の記憶は薄れていた。ところが、昨年、日大で国際シンポジウムが開かれた折、溝畑佐登史(京都大学名誉教授)さんが、「1983年のセミナーで博士課程に上がりたての院生である私にコルナイを紹介していただき、箱根までついて行きました。あの時の一連の出会いが研究の出発点になったように思います」と話され驚いた。懐かしい思い出がふと蘇った。

つい最近、書棚を整理していたら、コルナイ招聘関連の資料が一式、ファイルになっているのを見つけた。懐かしい手書きの書類やコルナイとの手紙のやり取り、記念にとっておいたプログラムが、そのまま残っていた。

### 翻訳出版の裏話

コルナイの来日に合わせて、コルナイの論文集(『反均衡と不足の経済学』日本評論社、1983年)を発刊した。たまたま雑誌「経済評論」編集部がコルナイに関心を持っていることが分かり、日本評論社に出版を引き受けてもらった。著者も訳者も印税なしという条件で。「経済セミナー」編集部とは、コルナイの記念講演記録を掲載するという話がついた。

さらに、佐藤経明（横浜市立大学教授）さんの仲介で、岩波書店の現代選書の1冊として、記念講演を含めた論文集を出すことが決まった（『「不足」の政治経済学』岩波現代選書、1984年）。この売れ行きが良かったので、1986年にもう1冊、コルナイ『経済改革の可能性』を同じく、現代選書シリーズで出してもらった。

本来であれば、コルナイの大著 *Economics of Shortage* を全文翻訳すべきだったが、大部の著作では出版経費をペイするだけの販売数が見込めない。だから、読みやすい論文集を編集することで代替した。欧米の諸国では原書をそのまま翻訳出版しているが、簡単に出版助成を受けることができない日本では、こうするよりほかに手がなかった。

1983年に出版した最初の訳書は、まだ原稿用紙を使った手書き原稿だったが、程なく社会学部資料室に UNIVAC 製のワープロが設置された。初期の大型機で TV 装置ほどの大きさがあつた。8 インチフロッピーを使う機器で、200 万円前後したのではないかと思う。以後の論文執筆・翻訳作業はすべてこの機器を使った。翻訳の生産性が格段に向上したのを覚えている。毎日 7-8 時間は使っていた。私が独占使用したために、他の同僚が使う機会を奪ってしまったが、もともと大学の研究室で仕事をする人が少なかったもので、それほど批判を受けずに済んだ。私は学生自治会担当として、毎日、大学に顔を出していたので、高価なワープロ機を事実上私物化したことも大目に見てもらった。

その後、1988年から1990年の2年間、外務省専門調査員で在ハンガリー日本大使館に勤務することになった。ハンガリーから戻って10年も経てないのに、「大学を離れることはけしからん」という教授会に、休職届を提出して何とか認めてもらった。学生担当の教授会副主任を終えた後も、学部長補佐（学部主任）を2年間続けていたので、「キャンパス移転が完了したし、給与を払わない休職なら、仕方ないか」という判断になった。

1990年1月に、東京新聞の依頼で、ボストン・ケンブリッジにコルナイのインタビューに行く機会があつた。ブダペストから3泊4日の日程でハーヴァード大学にコルナイを訪ねた。コルナイ夫妻が住んでいた瀟灑なマンションでインタビューを行い、ハーヴァード大学の研究室を案内してもらった。研究室は広く、ハンガリーから同伴したアシスタントが日常業務をこなしていた。廊下でガルブレイス教授とすれ違い、コルナイが会釈していた。この時のインタビュー記録は「経済評論」（1990年10月、11月、12月号）にも掲載された（<http://www.morita-from-hungary.com/j-04/04-01.html>）。

体制転換が始まって以降、私はコルナイの翻訳を止めた。以前ほどの鋭い切れ味がなく、分析が月並みになり、主流派経済学にも忖度するような傾向がみられたことが気になった。私に代わり、佐藤経明先生がコルナイの翻訳を引き受けられ、『資本主義の大転換－市場経済へのハンガリーの道』（日本経済新聞社、1992年）を翻訳出版された。

以後、しばらくコルナイとの関係は疎遠になったが、2005年春にコルナイから電話があり、家に呼ばれた。2002年にハーヴァードを退職し、オオブダの丘陵地帯にある新築のマンションに引っ越していた。食事をしながら、コルナイは発刊されて間もないハンガリー語の自伝の日本語訳を出せないかという話を切り出した。迂闊にも自伝が出版されたこと

を知らなかった。実際に目を通してから返事すると、その日は別れた。

家に帰り、読みだしてから止まらなくなった。コルナイの生い立ちが実に詳しく記述されている。叙述が多面的で、筆の運びが良い。これなら、大部の書物でもそれなりの需要があるのではないかと考え、すぐに翻訳作業に取りかかった。

しかし、いくら面白くても、一般には知られていない経済学者の自伝である。400 頁を超える書物の販売は容易でない。最終的に、日本評論社編集部の斎藤博さんに翻訳原稿を見てもらい、出版条件を出してもらった。斎藤さんは「自分も経費を負担するので、出版しましょう」ということになった。最終的に、私と斎藤さんが初期経費を折半し、訳者印税が入れば、斎藤さんに戻していくことにした。コルナイに日本の出版事情を話すと、「それなら自分も著者印税を放棄する」ということになった。

コルナイからハンガリー語本を受け取ってから1年後の2006年6月に、『コルナイ自伝』の日本語訳が出版された。日本語訳が『コルナイ自伝』の最初の外国語訳になった。その後、英語、フランス語、ドイツ語などの翻訳書が次々に出版された。日刊紙のみならず、週刊経済誌にも書評が出て、「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書のトップテンにランクインした。専門書として異例のランクインだった。また、青木昌彦さんは日本経済新聞に長文の書評を寄稿された ([http://www.morita-from-hungary.com/j-02/02-04/02-04\\_06.pdf](http://www.morita-from-hungary.com/j-02/02-04/02-04_06.pdf))。高価な専門書にもかかわらず、販売部数が伸び、出版経費をカバーして利益がでる売り上げを達成できた。第1版3刷りまで増刷できたから、専門書としては上々の出来であった。少なくとも出版社に損させることなく、完済とはいかなかったが斎藤さんの出資分のかなりの部分を訳者印税でカバーできた。

初版が刷り上がったところで、佐藤経明、久保庭真彰両氏と斎藤博さんを交えて、赤坂のイタリアンで細やかに出版を祝った。ブダペストでは稲川照芳・順子大使夫妻にコルナイ夫妻を囲む夕食会をセットしていただいた。

私は2009年にハンガリー語のエッセイ集を出版(Változás és örökség, Balassi Kiadó, 2009)したが、その中の1章でコルナイ経済学への私見を展開した。彼の著作が果たした社会的役割と理論そのものの有効性を区別して、後者の役割を過大評価するのを戒めた。コルナイは明言するわけではないが、自身への批判や理論への批判にはきちんと目を通して。「批判的なコメントは承知している。バランスがとれた評価になっている」と私に語った。コルナイからは裏表紙に掲載する推薦の言葉をもらい、50名ほど集まったブダペストの出版記念会にコルナイ夫妻も駆けつけ、祝辞をもらった。

その後、コルナイから資本主義にかんする論考の翻訳出版の可能性を尋ねられたが、とても売れそうにないので、やんわりと断った。私に代わって、溝畑佐登史さんがこの翻訳を引き受けられた(溝畑他訳『資本主義の本質について』NTT出版、2016年)。コルナイへの恩返しだったのである。

## ノーベル経済学賞のこと

コルナイは1976年から翌年にかけて、ストックホルム大学の客員研究員として、スウェーデンで過ごした。この時期に、「不足の経済学」の全体像が完成したと『コルナイ自伝』に記している。この時期は別の意味でも、コルナイ家には重要な出来事があった。

コルナイと夫人のジュジャはともに再婚で、コルナイには最初の妻に残した二人の息子がおり、ジュジャは一人娘ユーディットを連れての再婚だった。ストックホルムにはユーディットも一緒だった。ユーディットはストックホルムで数理経済学の若手研究者であるユルゲン・ヴァイブルと知り合い結婚した。この結婚はいろいろな意味を持っていた。

コルナイをスウェーデンに招聘したのは、アーサー・リンドベック（ストックホルム大学教授）である。リンドベックはスウェーデン経済学界の重鎮で、1969年からノーベル経済学賞の選考委員を務め、1980年からは選考委員会委員長を務めた人物である。ユーディットを娶ったヴァイブルはリンドベックのアシスタントとして、ノーベル経済学賞選考委員会の指示に従って、候補者の研究業績を調べ、報告する役割を担っていた。また、Kornai, *Economics of Shortage*, North Holland, 1980の巻末に、ヴァイブルは数学付録を載せているほど、コルナイの「不足の経済学」とコルナイ家に繋がっていた。このことを考えても、いずれコルナイは有力なノーベル賞候補になると予想された。しかし、今から考えると、コルナイにとって、体制転換直後の1990年あるいは1991年が、もっともノーベル賞に近づいた年だった。そして、次の二つの事情が、コルナイの受賞を直接・間接に阻む要因になった。

一つは、ユーディットの離婚である。ヴァイブルとユーディットは1991年に離婚することになった。1991年に、私が法政大学を辞し、野村證券のハンガリー投資銀行開設の準備に入っていた時に、コルナイ夫妻が準備事務所を訪ねて来た。ユーディットがハンガリーに戻った時のブダペストの職探しである。野村で雇える可能性があるかどうかという相談だった。その後、ユーディットはスウェーデンに残ることになり、この話は立ち消えになった。

もう一つは、1994年のジョン・ナッシュのノーベル賞受賞をめぐる混乱である。1994年のノーベル経済学賞はノイマン-モルゲンシュテルンの *Theory of Games and Economic Behavior*（「ゲーム理論と経済行動」）発刊50年を記念して、ゲーム理論の研究者に与えられることになった。この受賞をめぐる、経済学賞選考委員会が紛糾しただけでなく、他の分野の選考委員からも異論が相次ぎ、反対がそれなりの数を占める中で、辛うじて受賞者が決定された経緯がある（シルヴィア・ナサー『ビューティフル・マインド』新潮社、2002年、533-562参照）。この時に候補に上がったのは、ノイマンと同じブダペスト福音派高等学校出身でアメリカ国籍のハルシャーニイ（ハルサーニイ）、ドイツのゼルテン、アメリカのジョン・ナッシュである。あまりに数学的なゲーム理論への授与が問題になっただけでなく、統合失調症を患っていたナッシュの受賞が大きな紛糾の原因だった。

さらに、ナッシュの病気が寛解しているか否かの判断だけでなく、そもそも50年前の大学院生時代の論文が対象になっていることに違和感をもつ選考委員が強く反対したからで

ある。ナッシュ論文は応用数学論文で数学的に新しいものではなく、均衡解証明にノイマンが使った「ブラウアーの不動点定理」に加えて、「角谷の不動点定理」を使ったにすぎないものだった。評価を求めてノイマンに論文を見せたナッシュは、「トリヴィアル。ただの不動点定理じゃないか」とノイマンに一蹴された経緯がある。数学にノーベル賞がないのに、新しい発見が何もない応用数学論文がノーベル賞を受賞することにたいし、数学者や他の分野の科学者も疑問を呈した。

こうした事情にもかかわらず、現代数理経済学の世界では、「戦後の数理経済学の土台を築いたのはナッシュ」という理解しがたい評価が定着している。ふつうに考えて、戦後の数理経済学はノイマンの先駆的業績なくして考えられない。ノイマンの着想によって、10名を超える多くの数理経済学者がノーベル経済学賞を受賞している。にもかかわらず、意図的にノイマンを無視するのは、天才数学者と比較されることを嫌う数理経済学者の歪んだ劣等感からである。数学の世界で業績を残せなかった数学者が、経済学分野に転身して応用数学分析でノーベル賞を受賞することが可能になるという不可解な事実を隠したいのだろう。

1994年のノーベル経済学賞は選考委員会の提案通り、ハルシャーニイ、ゼルテン、ナッシュの3名に授与されたが、ノーベル経済学賞選考委員会は混乱の責任を取らされ、解散を余儀なくされた。こうして、長年、スウェーデン経済学界を取り仕切ってきたリンドベックが、その役割を終えた。コルナイ経済学の理解者であるリンドベックの引退は、コルナイのノーベル賞受賞をさらに難しくした。

### コルナイ経済学の功罪

私の研究生活において、大学院時代に師事した先生方以上に、コルナイが与えた影響は大きい。コルナイは既存のイデオロギーや規範命題から出発する分析を排し、事実現象の分析から出発すべきことを強調し続けた。とくに日本では、コルナイが注目を浴びるまで、社会主義経済学はいわゆる「正統派マルクス主義」に立つか否かが、分析の正当性を判定する基準になっていた。きわめてイデオロギー的で不毛な研究が横行していた。それがコルナイの登場によって、イデオロギーの霧が取り除かれた。マルクス主義の立場から見て正しいか否かという規準ではなく、社会主義経済の現実の問題や矛盾がどこから生まれているのかという探求姿勢が、社会主義経済分析に新しい視角を与えることになった。コルナイ経済学は事実上、伝統的な社会主義経済学を葬った。この役割は正しく評価されなければならない。

事実現象から出発するという分析姿勢は、科学分析の基本である。そのことの重要性を強調したことも、経済分析方法論として、高く評価されなければならない。ただ、この点において、私はコルナイの分析の弱点を指摘し続けた。

コルナイはマルクスの分析の方法論的基礎であるドイツ哲学的な概念を徹底的に排除した。もちろん、コルナイ自身はマルクスの影響を受けている。たとえば、「資本論」が商品

の分析から始まるように、コルナイは社会主義経済の「社会論」を不足の分析から始めれば、マルクスのように一つの理論体系が構築できると考えた。1956年のハンガリー動乱によって、コルナイはマルクス主義からの決別を決断したが、マルクス的な分析手法は「不足の経済学」構築にも大きな影響を与えた。

他方、コルナイが明確に排除したのは、ドイツ哲学的な「本質」概念である。コルナイは現象と本質という対立概念を排除した。「本質」という見えないものを存在概念として定立することを排除した。この点で、私はコルナイの理解は誤っていると考える。

ここには現象自体をどう捉えるかという基本的な問題がある。自然科学者にとって自然現象はきわめて自明で普遍的だが、社会科学者のいう「現象」はほとんどが生の現象ではなく、それぞれの研究者の頭脳の中で一度加工された「現象」であることが多い。コルナイの捉える現象も、そのような「加工された現象」の一種である。したがって、「加工された現象」の限界を自覚しなければ、誤った結論を導くことになる。

さらに、「目に見えない」という理由から、事实现象分析から本質分析を排除してはならない。自然科学の分析でも、表面的に現れる現象を必然化させる「本質」を探求することによって、現象の背後に隠れているメカニズムが明らかになる。自然現象の階層性を分析していくことが、自然科学の基本的な手法である。つまり、分析によって、現象の背後に隠れている本質を抽出すると、それがまた下層レベルの現象になる。現象と本質は相互に層を形成している。この層を次々に分析することによって、自然科学が発展してきた。

これと同様に、社会科学においても、現象と本質の相互作用や、現象と本質の階層性の分析が必要である。たとえば、社会関係という現象は目に見えるものではないが、種々の社会関係にはそれを成り立たせる本質的な関係があり、それがまた下層レベルの現象となっている。したがって、深みのある社会分析には、現象と本質の相互関係と、階層性の多次元分析が不可欠である。マルクスの「資本論」が世紀を超えて読み続けられるのは、このような重層的な分析にもとづく体系をもっているからであり、それはドイツ哲学に裏打ちされた深い哲学的思索が基礎になっている。

現代経済学の弱点もまたここにある。哲学的思索を排除する現代経済学は基本的に現象学のレベルにとどまっており、いわば平面的分析に終始している。そこには社会経済現象の階層性分析が入り込む余地はない。極めて平板な分析である。数理モデルは一見して現象の複雑さを分析しているように見えるが、数学は平板な分析を価値あるように見せるための道具にすぎない。だから、いくら数学モデルが精巧に構築されても、現実分析にはほとんど役立たない。

さらに現代経済学は現象の一部を切り出した「加工された部分現象」をモデル分析する。ここでは気の利いたアイデアと数学的装置が論文作成の鍵となる。「不足の経済学」で展開された個別のアイデアやアナロジーを切り取り、それを独立したテーマとして、モデルを作る試みが盛んに行われた。たとえば、コルナイが一つのアナロジーとして定立した「予算制約のソフト化」という「現象」は、生の現象ではなく、加工された現象である。

主流派経済学者の間で、この「現象」だけを切り取って、ゲーム理論の定理に仕立て上げることが一つの流行となった。それはそれで気の利いたモデル化であることは事実だが、ただそれだけのことである。現実分析にはほとんど役に立たない。コルナイは社会主義企業の経営規律の緩みを議論する際に、主流派経済学のアイディアを逆手にとって、アナロジーとして説明しただけで、社会主義企業の行動様式を多層的に分析することはなかった。

コルナイの分析が現象論にとどまり、階層性の分析に欠けることが、マルクスの「資本論」に匹敵する社会主義経済の「社会論」を構築できなかった原因である。コルナイを慕う中国の若手経済学者は国外に出て、コルナイのアイディアにもとづいて部分事象のモデル化に勤しみ、欧米の大学でポストを得ることに成功した。しかし、彼らの分析からは、中国経済の現実は何も分からない。抽象的な数学モデルを展開している限り、中国共産党から睨まれることもない。現実の腐敗現象を知ることなく、腐敗の数学モデルを構築しても、何も解明されない。しかし、コルナイはこの種の銜学的志向を批判することなく、逆に自らの経済学的アイディアを主流派の経済学界に知らしめる絶好の研究だと考えていた。主流派経済学者が理解できるアイディアが普遍的な認知を受け、主流派の重鎮たちの関心を惹き付けることができれば、ノーベル賞にも近づくと考えたのではないか。私がコルナイから「忖度」を感じるのはこの点である。

私は主流派経済学に阿（おもね）ることなく、理論家として孤高の姿を示したほうが、コルナイの業績を際立たせたのではないかと考える。しかし、それには強靱な哲学的思索が不可欠であった。コルナイはその道を排し、いわば知名度を得ることを優先した。確かに、コルナイは世界の経済学界で十分すぎるほどの名声を得たが、ノーベル賞は遠かった。

他方、「不足の経済学」が体制転換を惹き起こす社会運動の知的な推進力になったことはいくら強調してもし過ぎることはない。それだけでも、ノーベル賞を受賞する価値があった。しかし、現代経済学は毒にも薬にもならない狭い社会実験室のモデル分析しか評価できなくなっている。経済学の貧困の時代が続いている。